

身投げする女

野村胡堂

—

ガラツ八の八五郎は、こんないい心持になつたことはありません。

親分の銭形平次の名代みょうだいで、東両国の伊勢辰で鱈腹たらぶく飲んだ参会の帰り途、左手に折詰をブラ下げて、右手の爪楊枝つまようじで高々と齒をせせりながら、鼻唄か何か唄いながら、両国橋へ差ししかかつて来たのは真夜中近い刻限でした。

借着ながら羽織を引っかけて、懐中ふとしろには羅紗らしやの大紙入、これには親分の平次が、人中で恥を掻いちゃ——と一分二朱を入れてくれたのですから、自分の身上しんしやう、六十八文と合せて、八五郎すっかりいい心持になつたのも無理のないことです。

折柄の月夜、亥刻を過ぎると、橋の上もさすがに人足が絶えます。

「おや？」

ガラッ八は立止りました。ツイ眼の前へ、人魂のようにフラフラと行くのは、後姿ながら、若くて美しそうな娘、何やら思案に暮れる様子で、深々と顎を埋め、襟の掛った秩父絹の袷、潮垂れてはいるが、赤い可愛らしい帯、すらりと裾を引いて、草履の足音も、ホトホトと力がありません。

娘はガラッ八の跟いて来るのに気が付かなかつたものか、よろけるように欄干に凭れると、初冬の月を斜に受けて、鉛色に淀んだ川の水を、ジイッと魅入られるように眺め入りました。

後れ毛を掻き上げる繊弱い手、ホッと溜息を吐く様子までが、蹙音を忍ばせたガラッ八には、手に取る如く見えるのです。

娘はしばらく涙に暮れる様子でした。フト、後ろからガラッ八の近づくのに

気がつくくと、草履を脱いで、その上に何やら紙片を置き、簪かんざしを重石おもりにして、

「南無——」

欄干へ攀よじ登ったのです。

「危ないッ、待った」

後ろから飛付いたガラッ八、危うく欄干を越しそうにした娘の身体をもぎ離すと、それを抱き上げたまま、力余って後ろざまによろけます。

「あれーッ、放して下さい」

必死ともがく娘。

「とんでもねえ、放したら又飛込むだろう。どんなわけがあるか知らねえが、死ぬのは不了簡——」

「いえいえ死ななきやならないわけがある、お願いだから放して下さい」

華奢きゃしゃで骨細な娘ですが、必死の力を出すと、腕自慢のガラッ八にも容易には

押え切れません。後ろから羽搔はがいじめ締めに、欄干へ寄せないのが精一杯。

「死んで花実が咲くものか、——第一この寒空、死にようもあるのに、身投げしゅんに季節じゃねえ、——落着いてわけを話せ」

「お願いだから殺して下さい、どうせ生きていられない私」

身を揉むほどに、娘の身体がしっとり汗ばんで、燻蒸くんじょうされた脂粉しふんの匂いが、揉み合うガラツ八をふんわりと押し包みます。

「どんなわけがあるにしても、こうなつては見殺しには出来ない、——俺も男の端くれだ、及ばずながら相談にも乗ってやろう、先ず訳を話せ」

「親も兄弟もあるのだろう、後に残る者の歎きも考えて見るがいい」

娘はしだいに気が落着いたものか、争うのを思い止まると、ガラツ八の胸に

顔を埋めて、シクシクと泣き始めました。思い詰めた興奮が去ると、急に悲しみが蘇生よみがえったのでしよう。

「いったい、何が何で死ぬ気になったんだ、話して見るがいい」

「色恋さたの沙汰か」

娘は激しく頸くびをふりました。

「それとも、よくある話だ、主人の金を落したとか、盗まれたとか——そうでもない？」

「じゃ、若い娘が死ぬほどのわけがないじゃないか、一体どうしたというのだ」
ガラツ八の手は何時の間にか、娘の背を撫でて、その泣き濡ぬれた顔を覗い

ております。

「——叔母さんが、身売りをしろって言うんです」

「何？ 叔母さんが、身売って？——そんな馬鹿なことがあるもんか、親の承知しない者を、叔母が何と言ったって——」

「でも、私は親のない子で、叔父さん叔母さんに藁わらのうちから育てられました。

この暮のくり廻しが付かないから、吉原へ身売れと言われると、いやとは申されません」

「——」

「どうぞ殺して下さい。生きていても望みのない身体、小さいとき死別れた、ほん真実の両親のところへ行くのが、せめてもの望みでございます」

顔を上げた娘、涙はもう乾いておりますが、月の光りに洗われたようで、その美しさというものはありません。精々十八、九にもなるでしょうか、言いよ

うもなく哀れ深い姿です。

「とんでもねえ、身売りがいやだから死ぬというのは、若い者には無理のないことだが、どうせ金ですむことなら、何とか話し合いも付くだろう。ほんの少しばかりだが、これだけでも、持つて行くがいい」

ガラッ八は懐中ふところから羅紗らしやの大紙入を出すと、その中から一分二朱と六十八文の全財産を懐紙ひねに捻ひねって、娘の懐中に押し込みました。

「でも、私の身の代金は、年一杯で手取り三十五両と、女衞ぜげんが決めて行きました」

娘は少し困った顔を挙げます。

「なるほど、三十五両と一分二朱六十八文じゃ少し違い過ぎる、——こうしようじゃないか、俺がこれから叔父さん叔母さんに逢って、この暮くれに入要の金が、掛値かけねのないところいくらか訊いて、それだけ工面してやろうじゃないか」

「いえ、そんなにまでなさらなくても——」

「そんなことで人一人——それもお前のような綺麗な娘の命を助けられるなら、俺も本望というものだ」

「暮に要る金はたった五両、わけがあつて、私は知っております。手取り三十五両も入ったら、また博奕ぼくちの元手になることでしよう」

娘はやるせない姿でした。たった五両で死ぬ身が、我ながら疎うとましかつたのでしよう。

「五両位なら何とかなるだろう、俺の叔母の家はツイそこだ、来て見るがいい」
「でも——」

渋る娘しぶるの手を取るように、ガラツ八は叔母の家へ向いました。日頃ガラツ八の馬鹿馬鹿しさと純情さに打込んでいる独り者の叔母は、五両位のこととは、何とかしてくれそうに思えたのです。

それから三日目。

ガラツ八の八五郎は、銭形平次の家へ久し振りやって来ました。

が、格子こうしへ手を掛けて、

「ハッ」

と身を退いたのも無理はありません。中から後光ごこうが射したように思ったのは、いつぞやや両国橋で身投げを助けた娘が、平次と女房のお静おしずに送られて、沓脱くつぬぎへ下り立ったところだったのです。

ガラツ八はあわてて飛退くと、庭木戸の蔭へ身を潜ひそめました。あの晩のロマンスは、さすがに打明けそびれて、平次にも言わずにあります、秘し隠しに

していたガラツ八の身分を搜り当てて、娘がわざわざ礼に來たのでしよう。

こいつはいけねえ——、ガラツ八はそう言いながら、額から月代を掌で撫であげました。

そのうちに、もういちど丁寧に挨拶をして、娘は帰って行く様子。真昼の光の下で見ると、少しふけて、二十一、二と踏めますが、身装は思いの外リユウとして、その明るく愛嬌作つた美しさも尋常ではありません。

「八、何を驚くんだ」

銭形平次は早くも見つけました。

「へエ——」

「女の子が怖いのか、戸袋の蔭なんかへ隠れて」

「怖いわけじゃありませんが、へッへッ」

「いやな笑いようだな、まア入れ」

平次は呑込み兼ねた様子で八五郎を誘い入れました。美しい小春日が畳の上を這って、今まで敷いていたらしい、薄い座蒲団からユラユラと陽炎が立ち昇ります。

「あの娘は何を言ったんで、——親分」

ガラッ八は頸のところを搔きながら、膝小僧を揃えました。

「つまらねえ紛失物さ、——ところで、お前の方にも心当りがあるそうだ。いったいあの娘をどこで口説いたんだ」

平次は何やら嗅ぎ付けた様子で、ニヤリニヤリと陣を布きます。

「口説いたわけじゃありませんよ、親分」

「じゃ口説かれた口かい。たのもしいぜ、八」

「冗談で」

「早く白状しな、——俺は出て行かなきゃならない」

平次は少しも責め手を緩めません。

「笑っちゃいけませんよ、親分」

「笑やしないよ、子供の時から、俺は睨めっこの名人さ、可笑しくたって笑わないから」

「弱ったなア、親分。からかつちゃ話が出来ねえ」

「贅沢な男だな、さア、言いねえ」

そんな事を言われながら、八五郎はとうとう三日前の晩の事を、一伍一什話ぶしじゅうさせられてしまいました。

「叔母さんから五両借りて、暮の凌しのぎにさせるつもりで渡すと、娘はそれを握つて、一目散に駆け出しましたよ。身売りをせずに済んで、どんなに喜んだか解りません」

ガラツ八はこう語りおわりました。

「そんな親切の籠った金を貰って、娘は手前てまえの名も訊かなかったのかい」

「へエ——」

「少し薄情だと思わなかったか」

「面喰めんくらっていたんでしようよ、親分」

「仏様てまえだな、手前は」

「でも、ここへ尋ね当てて来たじゃありませんか、——叔母の家からでも訊いたんでしよう」

八五郎は娘の行動を理由付けるのに一生懸命でした。

「それが大笑いさ、あの娘は両国橋で助けて貰ったのは、八五郎あにい兄哥とは夢にも知らねえ。まるつきり違った用事で、この平次を訪ねて来たのさ」

「へエ——」

「驚くなよ、八」

「」

八五郎はゴクリと固唾かたずを吞みました。平次のニヤニヤした顔が、何をとんでもない事を言い出すか解らなかつたのです。

「あの娘こは、鳥越とりごえの平助店だなにいるお秋という者だ、——叔父、叔母といつてるのは全く他人で、これは飴屋あめやの丑松とお徳という、仕事の相棒さ。いづれよくない事で溜めたものらしいが、とにかく、三人で拵えた金が、驚いちゃいけないよ、八、二百九十五両」

「フーム」

「三日前に五両一分入って、ちょうど二百両一分になった。三百両になったら、百両ずつ三人で分けるといふ約束だったが、その時ちょうど肝心かんじんの飴屋の丑松が、木更津きさらびへ行って留守、帰って来たところで、三人立会いの上、隠した場所から取出したのは昨夜ゆうべだ。封を切つて見ると、中の三百両は綺麗になくなって、

蛙^{かえる}も何にもいないという話さ」

「これを聞かされるガラッ八の鼻の窓の大きいこと。」

「お秋は思案に余ってここへ飛んで来たのだよ、——どうせまともな商売で儲けた金ではないが、盗んだ金や掬^すった金じゃない。三年越^{みとせごし}身を削^{けず}る思いで溜めた三百両を、一人占めにされちや叶^{かな}わない。いずれ丑松かお徳の仕業に違いないから、何とかして取戻してくれ。とこういう頼みだ」

「俺はお上から十手捕縄を預る人間だ。世上の揉^{もめごと}事や、欲得^{ほつと}ずくの話なら乗出さないが、三百両は何といつても大金だ。盗賊の訴えがあれば捨てておくわけに行かねえ」

「だがな、八。手前てまえが身投げを助けて、五両で命を買った女が、本当にあの娘なら、話はなかなか洒落しゃれているぜ。俺の代りに行つて見る気はないか」

「へエ——」

ガラツ八はつままれたような心持でした。が、娘の正体を突き止めて、どんな顔をするか、見てやりたくないでもありません。

第一、紛失ふんしつした三百両を捜し出して、あの娘の前へ積んでやるのは、いつぞやの晩、五両一分二朱六十八文の金をやった時よりも、もっとよい心持になれそうな気がしたのです。

三

鳥越の平助店だなは、袋路地の別世界を形成した、総後架そうこうかの前の四軒長屋でした。

路地の外に頑張がんばって、しばらく様子を見てみると、鉄砲てっぽう箆ざるを担いだ屑屋くずやが一人、何にも言わずにノソノソと入って行きます。多分、この路地に住む店子たなこの一人でしょう。

「ちよいと、待ってくんな」

ガラッ八は呼止めました。

「へエ、へエ、何かお払いでも——」

四十年配の少し世の中を茶にしたような髯面いんぎんが、それでも慇懃いんぎんにガラッ八の前へ小腰を屈めました。

「払い物じゃねえ、ちよいと訊きたいことがある。そこの長屋の事だが——」

「へエ、私の家は左側の二軒目で」

「そんな事じゃない——とにかく、外へ出て一杯やりながら訊こうじゃないか」

「へエ——」

屑屋は自分の家へ箆ざるを抛ほうり込むと、黙もくって跟ついて来きました。こんな事には慣なれている様子です。

町へ出ると、すぐ見つかつた飲屋。縄なわ暖の簾れんの中を覗のぞいて、人のいないのを見定まめてから入ると、樽たるてんじん天神をきめ込んで、瞬またたく間に二本三本と倒たします。

「さア、親分、訊きいて下さい。何でも言いいますぜ、へッへッへッ」
屑屋は酔よいが廻まつたらしく、胸むねをはだけて、可笑わらしくないのに卑屈ひくつな笑わらいようをしております。

「実は、あの路地ろじの中に住すんでいるお秋あきという娘むすめのことだが——」
八五郎やちごろうは四方あたりを見廻まわしながら小聲こゑで切出きりだしました。

「へッ、へッ、へッ、——知しってますよ、親分も引ひつ掛かけられた口くちでしょう。——
枝えだぶりの良い柳原やなぎはらの松まつですかい、それとも両国りやうこくの橋はしの上うへで——」

「——？」

「土左衛門の真似はお秋がいかに女河童でも時候じゃないから、やはりブラ下りの口かな」

屑屋はすっかり呑込んで、身振り入りで浮かれております。

「何だい、それは」

「知ってますよ、親分、——親が病気で身を売らなきゃならない——とか、主人の金を五十両落つこととした——とか、泣きながら、恐ろしく色っぽく持ちかけるでしょう。あれが術てなんで、へッへッへッ」

「——」

「こちとらがやったんじゃ、お笑い草だ。ブランコの足を引張られるか、川へ突き落されるのが関の山だが、——若くて綺麗な新造はトクだね、親分。十人が十人、有金引はたつ叩かせられて、娘がいやがるのも構わず、ここまで送って来る、——それから翌る日知らん顔をしてここへやって来て、娘の身許を訊くと

ね、——筋書は大抵決つたものさ」

「ね、親分。悪いことは言わねえ、黙って帰んなさい、荒立てると恥を大きくするばかりだ。あのお秋という娘は、虫も殺さねえ顔をしているが、海千山千の、下っ腹に毛のねえエテ物さ。丑松は飴屋崩れの凄^しい男で、お徳はその上を行く塩っ辛い大年増だ。四つに組んでもトクのいく代物^{しろもの}じゃねえ。屑屋を渡世の俺でさえ、あの三人はよけて通ることになっているのさ」

「——」
ガラツ八の八五郎も、正に一言もありません。身投げ渡世の女を救つて、五両一分二朱騙^{かた}られたとは、さすがに言うわけにも行かなかつたのです。

「こいつは大笑いさ、——一杯飲まして頂くから言うんじゃねえが、あの路地^{ほい}を入つて、お秋の家を未練がましく覗^{のぞ}こうものなら、やった金へ利子が付く。」

へッへッ、あつしに逢つてからくりをみんな聞いたのが、親分の仕合せだぜ――

屑屋ちようこうぜつの長広舌は、どこまで続くか解りません。

「俺はそんなじゃねえ、これを見るがいい」

ガラツ八はあまりの事に我慢がなり兼ねたものか、懐をくつろげて、チラリと十手の房を見せました。

「へエツ、親分さんは、お上の御用うけたまわを承る方で――そいつは知らなかった、とんだ事を申しました、勘弁なすっておくんないまし。ところで、いよいよあの三人にも年貢ねんぐの納め時が来たのですかい、親分さん」

屑屋は急にペコペコし始めました。

「いや、大金が紛失ふんしつしたと、娘が訴人して出たよ」

八五郎は、身投げの狂言に引っかけられた一人と思われたくないばかりに、

ついこんな事まで言ってしまったのです。

「へエ、あの娘がですかい。へエ、三年越みとせこしの身投げ狂言だから、三百や五百は持っていたかも知れません。——そいつはいい気味ですね、——尤もっとも泥坊は判っているようなものだが——」

「判っている？」

「長屋はたった四軒、右側の二軒は空店あきだなで、お秋の家は左側の奥、私のうちの隣りです。稼業柄かぎようがら思い切り汚な造りな暮し向だから、外から泥坊が入りっこはありません。金のあるのを知っているのは、相長屋のあつしと、あの三人だけです。泥坊はあつしでなきや、丑松かお徳で、こんな解り切ったことはないでしょう、親分さん、——憚はばかりながらあつしには覚えがねえ。すると、やはり丑松かお徳」

身投げする女

この際限もない屑屋くずやの話を、ガラッ八は神妙に聞いておりました。三百両の

紛失は知らなかった様子ですから、泥坊は多分丑松かお徳でしょう。

その頃の三百両は、今の三百万円にも相当する大金で、紛失の訴えがあれば、御用聞が一応調べて見るのも、当然のことでもあったのです。

四

ガラッ八は屑屋に別れて、あめや 飴屋の丑松の家へやって行きました。

「御免よ、——丑松はいるかい」

荒い格子を覗く迄もなく中は見通しの二た間、形ばかりの古いたんす 箆笥が一棹、つづら 葛籠が一つ、割れたしがみひばち 獅噛火鉢、しん 芯の出た座蒲団など——見る影もないさんたん 惨憺たる住居です。

「誰だい、人を呼び捨てになんかしやがって、つら 面を見せろ」

隅っこでとぐろを巻いていたらしい中年男は、襦袢どしてらへ袖を通して、起き上がりました。

「大層な勢いだな——少し調べるものがあつて来たよ、起きて貰おうか」

「へエ——」

目ざとく十手の突っ張った懐中ふところを見ると、丑松は弾き上げられたように飛起きた。上役人だけは、極度に恐れるように習慣付けられた人種だったので、す。

「紛失物があつたそうじゃないか、どこにその金が置いてあつたんだ」
ガラッ八は精一杯の威儀いぎを作りました。

「へエ、恐れ入ります、——御苦労様で、へエ」

「そんな事はどうでもいい、俺の言う事に返事だけしてくれ」

「へエ、相済みません。——金は三百両、瓶かめに入れて封ふうをして、お勝手の落し

の中に置きました」

「奪られたのは」

「三日の間でございます。三日前にお秋が持つて来た五両一分二朱と六十八文のうち、二朱と六十八文は当座の小遣こづかいに取除け、五両一分を足して、丁度三百両と一分になったのを、封印をして落しに入れたまま、あつしは木更津へ参りました」

「何の用事で行ったんだ？」

「儲もけ口で御座いますよ、親分さん、——が、当てごとは向うから外れて、ボンヤリ帰って来たのは。昨夜ゆうべ。ここで三百両を三つに分けるつもりで瓶かめの蓋を開けると、中は空っぽじゃありませんか」

「——」

「盗ったのはあつしとお徳とお秋のうち、それに違いありませんが、あつしは

木更津へ行つて昨夜帰つたばかり、お秋は自分で稼かせいだも同様の金ですから、取る筈もなし」

「すると、お徳が怪しいと言うのか」

「そんなつもりで申したのじゃございません。近所だつて、正直者ばかり住んでいるわけじゃありませんから、へエ——」

「そのお徳はお前の女房じゃないのか」

「世間じゃそう思い込んでおります。もつとも、お徳もそのつもりでいるようで、へッへッへッ、焼餅やきもちばかり焼いて仕様がありません」

不思議な道徳を持った人達、ガラツ八は呑込み兼ねて顎あごを長くしております。

「女二人はどこへ行つたんだ」

「お徳はお神籤みくじを引きに行きましたよ。お秋は大方番所へでもお願いに行つたんでしよう、親分さんが来て下すつたところを見ると」

「お前は自棄やけになって、朝から飲んで居たのかい」

「へエ——」

これはガラッ八の探偵眼にもよく解ります。茹蛸ゆでだこのように真っ赤になって、熟柿じゅくしき臭い息をフウフウ吐いている丑松だったのです。

「その落しと、瓶かめを見せて貰おうか」

「へエ——」

案内されたのはお勝手、かなり重い土竈へつついをどけて、揚げ板はを剥ぐと、中は三尺四方位の穴になっております。隙洩すきもる光線で一面の埃ほこりは見えますが、瓶も何にもあるわけではありません。

「瓶は？」

「こっちに出してあります」

流しの前に据えたのは、一升入りほどの塩瓶しおがめ、蓋も封印もケシ飛んで、浅ま

しく空っぽの中を、天窓から落ちる微光にさらしております。

「お前さん、お神籤はみくじ大凶だいきょうだよ、人の気も知らないで、本当に」

ブリブリしながら帰って来たのは、丑松の女房のつもりでいるらしいお徳です。三十前後、醤油で煮にべめたような大年増ですが、どこか気の強そうなところがあって、丑松を取って押える貫禄は充分です。

「大凶は吉に変わるといふぜ」

「だって癩しやくじゃないか、四文払って、大凶の籤くじなんか引かされて」

お徳はお勝手口からヌツと入ると、出合頭であいがしら、ガラツ八と鉢合せをするほど近々と対面してしまいました。

「お上の御用を務めていらっしやる親分さんだよ」と丑松。

「おや？」

お徳は面喰って、しばらくは挨拶も忘れた様子です。

「三日の間、この家を明けたことはないのかえ」

ガラッ八は平次ゆず譲りの事務的な調子で、その驚いたところを突っ込みました。

「私は餚を売るのが商売だし、お秋さんは他に稼業かぎようがあるし、夜も昼も家を明け通しですよ」

「お前か、お秋が、一人で留守をしたこともあるだろう」

「今までだってありますよ」

「近所の者が忍び込んでも、知らずにいるわけだね。ここは一番の奥だから？」

「近所だって、お向うは二軒とも空いているし、物騒なのは隣りの屑屋より外きようじようむちにやありやしません。清吉といってね、人間は馬鹿げているが、兇状持ですよ」

「何の兇状持だ」

はたけあら

「畑荒しの、——本人が自慢で言うんだから嘘じゃありません。沼津にいますと

き、西瓜畑を荒して、それが表沙汰になつて三十叩かれて追放された——つて。
尤も^{もつと}丁寧^とに勘定したら、二十七しか叩かなかつた、お上にもお情けはあるんで
すつてね、親分さん」

どうもこの女から筋の立つた話を訊き出すのは、容易^{わか}の業^{わざ}ではありません。
しばし待ちましたがお秋は帰らず、ガラツ八は物足りないような安心したよ
うな心持で引揚げました。引揚げる前に、箆^{へら}筒^{つづら}や葛籠^{つづら}や、押入や天井裏や、一
応家の中を見たことは言うまでもありません。

五

「親分、大変ッ」

ガラツ八が飛込んで来たのは、翌る日の朝でした。

「何が大変なんだ、——虫持じや付き合いきれないぜ、毎日一度ずつ、その『大變』の振出しを呑まされちや」

平次は房楊枝ふさようじを井戸端の柱に植えて、手水鉢ちようずばちに水をくみ入れながら、こう振り返りました。

「あの女が殺されましたぜ、親分」

「どの女だ」

「飴屋のお徳が、今朝ドブ板の上へ四つん這いになっていたのを、屑屋くずやの清吉が見つけたんで」

「そいつは大變だ」

平次は大急ぎで顔を洗うと、着換きがえもそこそこ、鳥越の平助長屋へ飛びました。

「寄るな寄るな、下手へたに顔を出すと、掛り合いだぞ」

町役人と番太が、警戒の声を洩からしている中へ、平次と八五郎は息せききつて駆けつけたのです。

「あッ、銭形の親分さん、丁度いいところへ、八五郎親分さんも御一緒に——」
平次はそれを掻き分けるように、長屋の裏へ廻りました。

「あッ」

物馴れた眼にも、その惨憺さんたんたる有様はたじろぎます。お徳は後ろから頸筋を深々と切られて、半分開けたドブ板に手を掛けたまま、碧血へっけつの中に崩折くずおれています。
たのです。

刃物はよく切れそうな菜切庖丁なつきりぼうちようが一挺、これでやりましたと言わぬばかりに、死体の側に。

「これはどこのだ」

平次は取上げました。

「へエ、——私の家ので、世帯を置く人の払い物の中から、使えそうなのを残して置いたんで」

屑屋の清吉は神妙そうに顔を出しました。

「どこに置いてあった」

「お勝手でございますよ、親分さん。でも、戸としま締めなんかしたことがありませんから、案内知ったものなら、ちよつと戸をすかしただけで、わけもなく柵たなから取れます」

清吉は一生懸命の弁解でした。

「この死体の恰好は面白いだろう。八。ドブ板を剥はがそうとして、手を掛けたところを、後ろからやられた形だ、——お徳が金をここへ隠して置いて、取出そうとしたところをやられたか、それとも——」

平次はその後は言いませんでした。

その声を聞いて、家の中から出て来たのは丑松とお秋です。

「銭形の親分さん、とんだことになりました。とうとうこんなことになっておろおろするお秋。」

「気の毒だが、金は容易よういに戻るまいよ、——下手人を捜すのはわけもないが」

「親分さん」

「もつとも、三百両と一分のうち、五両一分の施主せしゆはここにいるが、本人は思いのほか諦めているぜ」

「まア——」

振り返ったお秋、ガラツ八と顔を合せて、さすがに仰天しました。たった四日前の一番甘かった施主せしゆ、この長い顔の持主は忘れようとして忘られる筈もありません。

ガラツ八はしかし、この娘をとがめる気にはなりませんでした。身投げや頸くび

吊りの狂言までして、三百両の大金を稼ぎ溜めた女にしては、何という清純な美しさでしょう。

打ち続く激動と疲労に、少し蒼くはなっておりますが、歌舞伎役者のように整った身体、古い衿あわせがピタリと身につけて、乱れた毛もたしなみを失うほどではなく、激情的に赤い唇も、深い悲しみを湛たえた黒い瞳も、ガラッ八の眼には、言いようもなく美しく悩ましく見えるお秋だったのです。

金はどこを探しても見つかりません。ドブ板の乱れ工合から見ると、多分三百両を隠したお徳が、人知れずそれを取り出そうとして、それを覗うかがっていた曲者にやられたのでしよう。

丑松はその晩も留守、これは自棄やけの小博奕こぼくちに夜明しをしたと解って——途中で抜出して、お徳を殺す時間があつたかも知れないにしても、一応は疑いの外におかれ、隣家の屑屋清吉は、いちばん不利な立場おちいに陥って、とうとう平次に

引立てられてしまいました。

「俺じゃねえ、俺はそんな人間じゃねえ。正直屑屋の清吉といや、浅草中で知らない者のない俺だ」

番所へ伴れて行かれても、清吉は必死と抗弁をつづけけます。

「畑荒らしの兇状持きようじようもちだと言うじゃないか」

「とんでもねえ、田舎の若い者が、西瓜すいかの一つや二つ盗ったところで、一々お上沙汰になってたまるものか、あれは見栄を張って、チヨイと言って見ただけの話さ。丑松の野郎は喧嘩兇状と、博奕兇状と二つも持っていると言うから、負けているのが癩しかくにさわったんだ」

この調子ですから、平次も手のつけようがありません。

「親分、屑屋の火鉢の中から、小判で三両出て来ましたぜ」

ガラッ八が飛んで来ました。

「どれ、見せろ、——成程、吹き立ての小判が三枚だ、これはどこから出した」

「国を出る時から、万一の用意に持っているんだ。お袋の形見だかたみ」
と清吉。

「嘘をつけ、あとの二百九十七両はどこへやった」

「知らねえ知らねえ、そんな事を知るものか」

「いや、知らないとは言わさない、——昨夜だって、三間とは離れないお勝手から庖丁を持出されて、ドブ板の上で人殺しのあったの知らなかった筈はな
い」

平次は容赦ようしやもなくグングンと突込んで行きました。

「自慢じゃねえが、俺は一杯飲んで寝ると、死んだも同様だ——飲まない晩の事なら、そのかわり何でも知っている。飴屋の丑松の野郎が、木更津へ行った
と言い触らして、賭場とばで夜を更かして帰って、お秋を誘さそい出したことまで——」

「待て待て、それは本当か清吉」

「本当も嘘もねえ。丑松を締め上げるなり、賭場を洗って見るなり、行ったという木更津を調べりや解ることだ。あの野郎は浅草切つての悪党だが、押かけ女房のお徳がその上を越す悪党で、丑松も女房の悪党ぶりが気味が悪くなつたんだよ。それに、間がな隙すきがな、綺麗なお秋を付け廻して、口説くどき落そうとしていたんだ。第一お秋の稼かせぎというものは容易じゃねえ。柳原土手と両国の橋の上で、この二三年の間に三百両——いや四百両も稼いでいる」

清吉の言葉には眞実性があります。

「八、行って見ようか」

「二人突き合せて叩かせると、お互いに埃ほこりの出ようが違やしませんか」
「その事だ」

平次はガラッ八に清吉を預けて、鳥越の長屋へ飛んで帰りました。お徳の死

体は一応家の中へ入れて、丑松はその前で茶碗酒を呷あおっています。

六

清吉の家の中から、三両、五両と順々に小判小粒が発見されました。壁の破れ目、畳の中、土竈へつついの下と、凡およそ人の氣のつかないところから、二日間に捜し出したのは、べめて十八両、あとの二百八十二両はどこへ隠したか解らず、清吉もまた、頑がんとしてお徳殺しを白状しません。

「金はその朝、死骸を見つけた時、側に落ち散っていたんだ。——出来心で隠したが、お徳を殺したのは、俺じゃねえ」と言い張るのです。

丑松は素直に、お秋を付け廻したことも、木更津へ行ったことにして、お徳

の鋭鋒えいほうを避け、実はお秋を誘い出しにかかったことも白状しましたが、お徳を殺したことはどうしても言わず、それに証拠が一つもありません。

丑松をいちおう帰して、お徳の葬とむらいをすませ、改めて呼出そうとすると、今度は、お秋が行方不明になった事がわかりました。

「しまったッ。お葬むすびいが済んだらすぐあの娘を呼出そうと思っていたのに、――あの娘は下手人か、でなければ何もかも知っていたに違ちがいない」

平次は口惜くやしがりますが、広い江戸、姿を変えてどこかへ潜もぐり込めば、容易のことでは見つかりません。

「あの娘が三百両を盗んで、お徳を殺したのでしょうか、親分」
ガラッ八は少し平たいらかでない様子でした。

「身投げの狂言で、三百両も稼かせいだ娘だ。顔は綺麗でも、あまり信用は出来な
いよ」

「そんな事はありませんよ、身投げの狂言は、芝居気さえあれば出来ます。泥坊や人殺しは、あの娘に出来る芸当じゃない」

ガラツ八は妙みょうにやつき、になります。

「まあいい、俺には俺の考えがある、——世間の評判でもわかる通り、悪かったのはあのお徳さ。いやがるお秋に、あんな仕事をさしていたんだと言うから」

「ね、その通りでしょう、親分」

「だが、あの日の朝、お秋の着物にドブ泥の着いていたことに気がつかなかったかい」

平次はそんな事まで見ていたのです。

「お徳の死骸を見て、びっくりして抱き上げたんですもの、溝泥どいどろも血も着きま
すよ」

「もういい、——今日は少し変だぜ、八」

平次は苦笑いして、鉾ほこを納めました。

「でも、これだけは聞いて下さい、親分。お秋は丑松を嫌ってはいるが、捨児すてこを拾って育てられた恩があるから、蔭じゃ丑松を庇かばっていますぜ。お徳はこの三年ばかり前に顔を出した女で、お秋に身投げの狂言きょうげんを仕込み、丑松を抱きこんで嫌がるのを無理にやらせた女だ。お秋とは人柄が違いますよ」

ガラツ八は日頃に似気なく調べが届きます。

「よく聞き込んだね、八」

「それほどでもありませんよ」

「とにかく、お徳の殺されたのは暁方あけがただ。その時刻に、丑松がどこにいたか、もういちど突っ込んで見るとしよう。それからお秋の行方は江戸中に網を張って捜さがさなきゃなるまい。あの娘が下手人でも、下手人でなくとも——」

あとの一句が、八五郎には氣に入らない様子でした。

「それから、二百八十二両はどこへ誰が隠したか、——金を持っている奴が、十中八九下手人に決っている」

平次はしばらく息を抜いて、誰が金を使い出すか、それを見てやろうとしている様子でした。

七

その頃から、浅草、下谷、日本橋、本所へかけて、不思議な届出とどけいでが続出しました。金額は定まりませんが、多いのは二十両三十両、少ないのは一分二分、現金を紙に包んで、窓からお勝手口から、雨戸の隙間すきまから、そっと投げ込んで行くものがあつたのです。

金額を調べてみると、遠くて一二年前、近くはツイ一二カ月前、柳原の土手か、両国橋で、自殺しようとしている娘を救い、その気の毒な事情に同情して、乞^こわ^るるままにくれてやった金と、細かい端^は数^{すう}までピタリと合っているではありませんか。

「八、お秋は金を返し始めたよ、——四五日前からやっているようだが、掛り合いが面倒だから、最初のうちは誰も届^{とど}出^けなかつたんだ、——今になって見ると、金を盗ったのは、やはりあの娘だったんだね」

「盗^{ぬす}つたり返したり、おかしいじゃありませんか」
腑^ふに落ちないのは八五郎ばかりじゃありません。

「とにかく、柳原の叔母さんの家へ行って五両の金が返ったかどうか訊いてくれ、多分いの一^い番^{ぱん}に返したと思うが」

「それから、これは大事なことだが、金を返した日と時刻じこくとを訊いて来るんだよ」

「へエ」

八五郎は飛んで出ました。

それから半刻はんときばかり。

「親分、変なことになりましたぜ」

旋風つむじのように飛んで帰ったのです。

「何が変なんだ、八」

と平次。

「金は確たしかに叔母のところに戻してありましたよ。懐紙わくしに包んで、小判で五両、

——ところが、窓から金を投げ込まれたのは、お徳の殺された晩で、しかも叔母がたった一人で晩飯の後片付けをしている時だというから、戌刻いっつより遅くは

ありません」

「何だと？ 八」

「金はお徳が殺される前——その晩の宵のうちに叔母のところへ返されたんですぜ。親分、これは一体、どう言うわけでしょう」

ガラッ八の疑いは平次の疑いでした。

「待ってくれ、——最初金が無くなつて、俺のところへ来たのはお秋だ、——その後でドブ板の下からお徳の隠した金を見つけたのかな、——すると、お徳を殺したのは誰だ」

二人は顔を見合せました。が、驚きはそれには止まりません。

「ちよいと、——お話中ですが、今こんな物をお勝手へ投げ込んで行った人がありますよ。すぐ追っ掛けましたが、姿は見えませんが、

身投げする女

お静が差出したのは、袱紗ふくさに包んだ、持重りのする品。解く手も遅しと、引つ

くり返すと、中から出たのは、五六十枚の小判と、二三枚の手紙ではありませんか。

「何だ何だ」

手紙の文句はしどろもどろで、文字は乱れ勝ちでしたが、判読すると、

お徳さんは私をおどかして、あのいやな仕事を続けさせました。三百両になつたら、それを三つに分けて止す筈でしたが、どうしても許してくれません。私はせめて自分の取前とりまえの百両だけでも、御迷惑をおかけした方へ返して上げようと思いましたが、お徳さんはいざという時になって、三百両みんな隠してしまつたのです。

平次親分にお願ひしたのは、その金を見つけて頂いていただ、足を洗いたかつたからですが、お徳さんはそれを察さつして、どこまでもこの仕事をつづけると、

いろいろ脅おどかしました。いやだと言ひ張つたら、私は殺されたかも知れませんが。

そのうち三百両の金は裏のドブ板の下に隠してあることが解つたので、お徳さんが酔つて寝込んだのを幸い、そつと取出し、鳥越とりごえさま様の石垣の穴に隠して、その晩から迷惑をかけた方へ返し始めました。柳原の八五郎親分の叔母さんへは、一番先にお返し申しました。

五六軒歩いて夜半よなかに帰つて来ると、私は何にも知らずに寝込んでしまいました。その後、暁方になつてお徳さんが外へ出て、ドブ板の下を調べて、金のなくなつたのに驚いてるところを、後ろから刺さされたのでしよう。私の取出した金は二百七十八両ですから、まだ少しは残っていた筈です。私はこのお金をみんな返してしまふまでは、縛られても、殺されてもいけな

とう家出をして、三日の間に、知っているだけは皆返しました。あとに残ったのは五十三両、これは旅人から頂いたので、お家も、お名前も判らない口です。どうぞ、困っている人達にでも上げて下さい。

私はもう、するだけの事をしてしまいました。

耻かしい身体を、皆様のお目に曝すのは我慢が出来ません。今度こそ本当に身を投げて死んでしまいます。

いろいろ御恩になりました。草葉の蔭から、末永く御礼を申し上げます。

平次親分さま

八五郎親分さま

「わッ、とうとう死んじまいやがった」

八五郎はフラフラと立上がりましたが、どこへ行く当てもなく、どっかり坐

りました。

「いや、まだ死なない、——身投げは昼じゃ出来ない」

平次は落着いております。

「でも飛込む場所が判らない」

「いや、俺にはよく判っている」

「助けてやって下さい、親分。身投げの狂言は悪いが、あの娘は根が正直者だ」

「解ってるよ、それより先に、お徳殺しの下手人を挙げよう」

「誰なんで」

「お秋が庇ったのは、育ての恩のある丑松だ。下手人は清吉でなきや、庖丁の

切れ味きれあじを知っているお秋か丑松だ。清吉は十八両の金を盗んだだけ、お秋はその

晩もう金を返して歩いている。残るのは丑松だ。——多分こうだろうと思うよ、

暁方になって丑松は賭場とばから拔出してくると、お徳がドブ板の下で金を探して

るのを見つけたんだらう。フラフラと邪魔者じゃまものを殺して三百両せしめる気になった。が、殺しただけで、金を取る前に清吉に見つけられ、驚いて隠れたに違いない。俺は最初お秋を疑ったんで丑松を厳きびしく調べなかったが、今度は逃しっこはない」

平次とガラツ八は飛んで行って丑松を挙げました。頑強に口を緘つぐみましたが、後から後からと見つけた証拠を突っ付けて、とうとう口を開かせたのは宵の口。

「親分、暗くなりましたぜ」

ガラツ八は気が気じゃありません。

「今からで丁度いいよ」

二人はそのまま両国へ向いました。

「お秋はここへ来るに違いない。お前は西にいるがいい、俺は東の方に頑張がんばる」
平次は橋を渡って向うの方へ行きました。

それから一刻あまり、橋の上の往来の全く絶えた頃、浜町の方から、月下の橋へ急ぎ足に差ししかかった娘があります。

真つ直ぐに延びた身体、正面を向いた顔、何の憂愁ゆうしゆうもない事務的な足どり、あまりの平静さに、ガラッ八は危うく見落すところでしたが、橋の欄干らんかんへ寄つて、何の思い入れもなく、あわや身を躍らしそうになつたのを見て、ガラッ八は死物狂いに駈け寄りました。

「待った、——待ってくれ、死ぬには及ばねえ」

「まア、八五郎親分」

身投げする女



©2017 萩 袖月

狂言とは、何という違いでしょう。娘の身体を引寄せて、犇ひしと押つけながら、
胴どうぶるいをしていたのは、何とガラツ八自身の方ではありませんか。

お秋は八五郎の腕の中に任せ切つて、もがきもどくもありませんでした。悲しく
挙げた顔は塑像そぞうのように硬張こわばつて、蒼白い頬は涙の痕あともなく乾き切つてお
りました。これは満足し切つた人の顔です。しかも、この世の人とも思えぬ美し
い顔だったのです。

平次はそれを、遠くの方から黙つて見ておりました。何という不思議な情景
であつたでしょう。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵—萩 柚月

初出—「オール讀物」昭和十一年十二月号 文藝春秋社

底本—「錢形平次捕物全集」第三卷 河出書房 昭和三十一年六月十五日初版

編集・発行 銭形倶楽部

身投げする女



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>